オフィス環境の改善は、中長期的な生産性向上につながっていく

工場など生産現場では、作業環境の改善が生産性向上につながることが知られている。ホワイトカラーの働くオフィスでも、環境改善は一定の相関関係があるという。オフィス環境と生産性やモチベーションの関係に詳しい関西学院大学・古川靖洋教授に聞いた。

▶古川靖洋氏 氏
関西学院大学総合政策学部教授

オフィス環境の改善と生産性の向上の相関関係

オフィス環境と、そこで働くホワイトカラーの生産性やモチベーションの間には、一定の相関関係があることがわかっています。約二〇年間にわたり、延べ五〇〇〇人のホワイトカラーと複数の企業にアンケート調査をした結果、オフィス環境の改善は生産性やモチベーションの向上に、一定の効果を発揮することが浮き彫りになっています。

ただ、ここでいう生産性とは、売り上げ増、収益増という直接的な財務改善を意味するわけではありません。ホワイトカラーの生産性の定量評価には、多様な側面を考慮する必要があるため、簡単ではありません。たとえば、経営資源の投入量に対し、アウトプットがどの程度増えるかを見たとしても、リストラや省エネなどオフィス環境の改善そのものとは関係のない要素も入り込みかねませんから、適切とはいえません。そこで、オフィス環境の改善によりアイデアの創出頻度、情報交換の頻度、モチベーションなどが向上したかどうか。これらが向上していれば、中長期的には財務的な生産性向上につながる、といった意味であることを最初にお断りしておきます。

経営戦略実現のためのオフィス環境

モチベーションに関していえば、機能的で快適なオフィス環境であるほど帰属意識が高いことは、はっきりしています。モチベーションは、会社への帰属意識と仕事への意欲がそろって初めて高まるものです。数十年前とは違い、最近の住環境の改善は目覚ましく、少なくとも一般の住環境よりオフィス環境の方が上回っていなければ、帰属意識はなかなか高まりません。働き心地のよいオフィスが、モチベーションの源泉ともいえるのです。

しかし、単純にオフィスを最新のスタイルに刷新すればよいわけではありません。ローパーティションで区切ったり、フリーアドレスの導入、リフレッシュスペースを設けるなどしただけでは、効果は期待できません。

重要なのは、経営理念、経営戦略を社員全員が共有し、それらを実現するためのオフィス環境であることが全社的に理解されていることです。この理解がないと、使い勝手が悪くなったという不満のタネにもなりかねない上、リフレッシュスペースなどは仕事をサボる場として捉えられてしまう恐れさえあります。

仕事意欲を高める上で欠かせないIT投資

仕事意欲を高めるには、必要な情報が共有されているかなどコミュニケーションが活性化しているか、意思決定への参画を実感できるかどうかなどがカギを握っており、これらを補完する形で情報システムの整備などIT（情報技術）投資が欠かせません。ITシステムは日進月歩で技術が進んでいますから、導入後も適宜システム改善をはかることが大切です。特にインターネット回線の速度に関しては、不満が多いのが現状ですから留意する必要があります。

オフィス環境の改善に取り組む場合、経営トップ主導の下に総務部門は中心的な役割を果たすことが期待されます。各部門の管理者に積極的に働き掛け、業務実態を把握するとともに改善へのアイデアを募り、自社に合ったオフィス環境を社員とともに考えていくべきです。従来と全く違ったオフィス環境に変える場合は、なぜそのようなオフィスが自社の経営戦略を遂行する上で不可欠なのか、社員に周知徹底していくのも総務部門の役割です。どのようなオフィス環境が最適なのかは、それぞれの業種業態、職種や社員数などで異なるのは当然です。それだけに社員全員参加の下に、自社にふさわしいオフィス環境作りを進めることが重要です。

アイデアがないところにイノベーションはあり得ません。企業の持続的な成長のために、オフィス環境に対する関心がさらに高まることを期待したいものです。